

5
すべてがちょうどいい食堂



「それで？」

美術館で起きたことを妹に話すと、

「それで、兄さんはどうするの？」

と妹は正面から訊きいてきた。

「いや、どうしたものかな、と思って」

言葉を選びながら、たどたどしく答えると、

「どうして、兄さんに会いたいんだと思う？」

妹の問いはそのまま自分の疑問でもあった。

どうして、僕に会いたいのだろう。

いや、正確に言うと、その人は「絵の中の彼に会ってみたい」と言ったのだ。だから、その人が会いたいの十七歳の僕であり、三十二歳になつてしまったいまの僕ではない。そう思うと、なんだかがっかりしてしまふのだが、いまの僕に会つてがっかりするのは、実際のところ、その人の方だ。

そんなこんなで、こちらとしてもその人に会っ

てみたいような、みたくないような複雑な心境だったのだが、美術館の金沢さんに、

「どうされますか、お会いになりますか」

と訊かれたとき、反射的に、「そうですね」と答えてしまった。

「では、彼女に伝えておきます」

金沢さんは僕のフルネームと連絡先を控えたが、自分としては、心の準備みたいなものが必要ではないかと、そこのところだけは直感めいたものが働いた。急に会いに来られても、うまく対応できないかもしれない。

「僕の方から伺ってもいいでしょうか」

「分かりました。では、彼女に訊いてみます。それで問題がなければ、あとで彼女の連絡先をお伝えします」

金沢さんは書類の角を揃えながらそう言った。

「それで、さっき、連絡があっただけだね

――

僕としては妹に相談するしかなかった。

いざ、その人の住所や電話番号を教わってみると、急に絵の中の二次元が三次元のこちらへ飛び出してきたようで、少しおそろしいような妙な心持ちになった。

いや、この場合、飛び出してくるのは、その人ではなく僕の方なのだが。

「で、その人の名前は？」と妹に訊かれ、

「イトウさん。イトウミユキさん」

と、金沢さんから電話を受けて走り書きしたメモをポケットから取り出した。

「お店をやっているみたいで、連絡先はそのお店みたいだけど」

「そうなんだ。お店って、なんのお店？」

妹はじれったそうに僕の手からメモを奪い、走り書きのひどい字に眉をまゆひそめながら読み上げた。

「へキッチンあおい」——ってレストランかな」

金沢さんの話では、

「レストランというより食堂と呼んだ方がいいでしょう」

とのことだ、

「わたしも一度、伺ったことがあるんですが、ミユキさんらしい——ええ、わたしたちは皆、彼女のことを『ミユキさん』と呼んでいたんですけれど、ミユキさんらしいシツクな佇まいのお店でした。ロールキャベツがおいしいんですよ」

そんなことまで教わっていた。

「じゃあ、あれじゃない？」と妹は急に早口になった。「その人に会いに行くっていうより、その食堂？ にランチでも食べに行くくらいの感じでもいいんじゃない？ 気楽にね。なにも面接に行くわけじゃないんだから」

いや、面接だったら、まだいいのだ。これまでに声の仕事のオーディションをいくつか受けてきた。そうしたものには、それなりの心構えがある。でも、「絵の中の人に会いたい」と願っている人がいて、その絵の中の人自分が自分であった場合、さていったい、どんな心構えで、「あれは自分です」と名乗り出ればいいのか。

それに、いくら妹と話し合っても、どうしてその人が——その「ミユキさん」という人が、絵の

中の僕に会ってみたいのか、その理由が思い当たらない。そこには何らかの事情があるはずで、もし、その事情に多々たさんが関かわっているのであれば、多々さんに会いたいというこちらの望みに光明が見えてくる。

「それはないと思うな」

僕よりずっと頭のいい妹が、これまでの話を整理するように言った。

「だって、そのミユキさんという人は、その美術館で働いていたんでしょう？ それってつまり、その——なんだっけ？ 金沢さん？ と一緒に、作者の分からない作品の常設展を管理していたってことよね。となると、ミユキさんは多々さんのことは知らないんじゃない？ 知っていたら、作者不明ってことにならないわけだし」

そのとおりだった。

「期待しない方がいいってことよ。兄さんにとって有益なことは何もないって思った方がいい」

ふうむ——。

「だからまあ、その食堂でおいしいロールキャベ

ツをいただいでくればいいじゃない」

ひとまず、そういう結論が出たので、少なからず妹に相談した意味はあったのだと思うことにした。

*

それは何の変哲もない火曜日で、空が晴れわたった、暑くも寒くもない、いたって平凡なお昼どきだった。

あらかじめ、インターネット上の地図で「キツチンあおい」の場所を確認すると、そこはどうかやうら、一度も行つたことのない町だった。最寄り駅は急行が停まる駅のひとつ隣で、「四島」という。駅名からして馴染みがなく、「しじま」と読むようだが、その字面と音の響きが、自分の生まれ育つた「西島」によく似ていた。

(面白いな)

声にならない自分のつぶやきが頭の中に響き、それで余計な緊張が解けたのかもしれない。

ひと気のない駅を出て住宅街の道を歩くと、いくらも行かないうちに下り坂になり、それがまた冗談のように急な坂で、スキージャンプ台に匹敵すると言っても大げさではない。目指すところは坂の下で、地図で見ているときはその高低差が分からなかったが、おり始めると、体が当然のように前のめりになった。

「気楽に行ってきなよ」

妹にそう言われたので、のんびりゆっくり目指すつもりだったのだが、これでは、勢いに乗って自然と足早になってしまふ。

それが自分でもおかしかった。

「面白い」

と思わず声が出る。まるで早回しのフィルムのようで、自分の意思ではなく、何かに背中を押され、何かにそそのかされて足が勝手に動いているようだった。

しかし、こうして、かなり過酷な道行きを強いられているのに、なぜか、遠いところから自分の町へ戻ってきたような安心感があった。町の名前

には馴染みがないのに、町そのものには親しみを感ずる。

(面白いな)

思わず頬ほおがゆるみ、周囲に誰もいなかったのによかったが、かなりおかしな奴やつに見えただろう。もしかして、頬がゆるむどころか、笑いながら坂をおりていたかもしれない。

それはどれくらいのことだったろう。数十秒であつたか、それとも数分であつたか。つんのめるような早歩きになり、そのせいか、時間の感覚が揺らいで分からなくなった。

が、おりきつた坂道は桜並木を擁した遊歩道に交差していて、今度は、

「あれ？」

と声が出た。

もしかして——と探る必要もなく、こうした地形であれば、むしろ当たり前だと合点がいく。

その遊歩道は、かつてそこが川であつたことを示していた。

経験的にもそう思う。

河口の町に生まれ育った者にとって、川は最も身近なもののひとつだが、川が流れていく先はすぐ海になってしまうので、いま一方の、川が流れてくるところ——上流への意識が常に働いている。言い換えれば、川沿いの道をさかのぼっていくとどこに辿り着くのかという興味が、子供の頃にはあった。

「子供の頃」と限定してしまうのは、あるときを境に、さかのぼったところに流れていた川が次々と暗渠あんきよになってしまったからで、そのときも自分は、

「あれ？」

と立ち尽くして、暗渠の上につくられた遊歩道を別の世界の景色のように眺めていた。

幸い——と言っていいかどうか——西島町を流れる川は昔と変わらない。いまも、そこにそのまま流れている。暗渠になってしまったのは、ずいぶんとさかのぼったところで、自分が見届けた限り、その多くは桜の木が並ぶ遊歩道になっていた。もともと川の両岸に植えられていた桜の木が、見

えなくなつた川の形を伝えるように残されていた。その、何とも言い難い、「残念」に近い思いが呼び覚まされた。

と同時に、これもまた何とも言いようのない郷愁のようなものが体の芯から沸き起こってきた。

おそらく、その「残念」と思う気持ちからも自分はいま遠く離れている。

ようするに、川の存在が大きかった子供の頃から遠く離れてしまったわけで、「残念」や「悲しさ」や「切なさ」といったものも、こうして時間が経てば懐かしさに変わっていくものらしい。

坂をひとつおりただけで、いくつもの感情や風景に再会した気分になり、そうしたものをコーヒ―をいれるときのように濾過^{ろか}し、一杯の飲みものに仕立てるとしたら、やはり、

(面白い)

のひと言になる。

その面白さには、さらにおまけがあり、そこがかつて川であったことを示すように、遊歩道に渡された舗道^{ほどう}の端に、〈あおい橋〉と彫られた欄干^{らんかん}

がのこっていた。

なぜ、イトウミユキさんの営んでいる食堂の名前が「あおい」なのか——それもちよつとした疑問であったが、こうして食堂まであと数メートルのところへ来てみれば、由来はじつにシンプルなものであると分かった。

*

金沢さんが言っていた「ミユキさんらしいシツクな佇まいのお店」というのはそのとおりで、目立った看板ではなく、〈キッチンあおい〉とごく控え目に掲げていた。店名の下に、「ロールキャベツの店」とさらに小さな字で記されている。

もし、何も知らなければ素通りしていたかもしれない。が、店の中から漂ってくるおいしそうないい香りが、質素な佇まいを温かみのあるものにしていた。

たしかにこれはレストランというより食堂だ。気どったところがなく、行き過ぎた酒脱しやだつの味気な

さもない。

すべてがちょうどよかった。

思わず、深呼吸をひとつする。

舞台に立つ役者の気分だ。

どうして、こんな緊張を強いられるのか、よく考えてみても分からないのだが、多々さんにあの絵を描^かいてもらった時間から十五年も経ってしまったことを、なんだか申し訳なく思ってしまう。

すみません、僕はあなたが会いたいとおっしゃった「絵の中の人」なんです、ご覧のとおり、もうあの絵に描かれた僕ではないんです。もっと早くお会いできればよかったです——。

いや、そんなふうに考えるのは気負いすぎだ。

あらかじめ、金沢さんから連絡がいつているだろうし、そのうち、「絵の中の人」が食堂を訪ねてくることをイトウミユキさんは知っている。

だから、僕の顔を見て、もし、気づいたとしてもさして驚かないだろう。というか、僕が「絵の

中の人」であることに、たぶん気づかない。

だから、緊張などする必要はない。

たまたま、このおいしそうな香りに惹かれた通りがかりの客を装えばいい。こちらから名乗らなければ、食事を終えて店を出るまで気づかないのではないか――。

そう自分に言い聞かせてドアを開いた。

いい香りがひとまわり大きくなり、あたたかい風を浴びたように包み込まれた。

狭くも広くもない店だ。小ぶりな四角いテーブルが四つ並び、意表をつかれたのは、他に客がないことだった。

「いらっしやいませ」

店内の奥にいた女性が小さく声を上げ、僕がテーブルにつくと、なんとなく、その女性が僕の顔をじっと見ているような気がした。

いや、それは自意識過剰というものだ。

その証拠に、すぐに彼女は視線をはずし、ガラスのコップに水を注いで持ってきた。一緒にメニューも持ってきて、真っ白なクロスがかかったテ

ーブルの上にそれらを静かにそっと置いた。思いきって、彼女の顔を見てみたが、向こうはこちらを見ていない。

やはり、気づいていない。

あるいは、この女性はイトウミユキさんではないのかもしれない。

というのも、ちゆうぼう厨房があると思われるところから、包丁でまな板を叩いてたたいる音が聞こえ、あきらかに、もうひとり別の人の気配がそこにあった。つまり、イトウミユキさんは厨房の中にいて、メニューと水を運んでくれた女性はアルバイトであるというふうに考えられる。

メニューには、「ランチメニュー」とあり、ロールキャベツ定食とササミカツ定食のふたつが並んでいた。サラダ、ライス付きとある。

「あの」と女性に声をかけると、「はい」とすぐにテーブルにやって来た。

「ロールキャベツ定食をお願いします」

と、自分でもどうしてこんなに強張こわばるのかと思

うほど硬い声になった。

「はい」

彼女はかすかに笑みを浮かべて頷き、メニューを手にして厨房があると思われる店の奥へ引っ込む。つい耳を澄ましてしまったが、なにやら奥から声が聞こえ、それは想像どおり、二人の女性が話している声だった。

やはり、いまこの店には二人の女性がいる。

おそらく、料理をつくっているのがミユキさんなのだろう。

となると、やはりこちらから名乗り出ない限り、僕が「絵の中の人」であると気づかれることなく食事が終わってしまう。

では、どのタイミングで、「あの」と声を上げ、「じつを言いますと、僕は絵の中の人なんです」と告白すればいいのか――。

急に喉のどの渴きを覚えてコップの水を飲むと、それはすっきりと冷たく、おいしいお酒のように喉から食道を通して胃の全体に染みわたっていくのを感じた。

(おいしい)

と料理の前にその冷たい水に感心し、もう一口飲もうとしたとき、

「え？ 本当に？」

という声が奥から聞こえたような気がした。

コップをテーブルに置いて耳を澄ましてみるも、しんと静まりかえっている。

店内には音楽もなく、その静けさに耐えかねて周囲の壁を見まわすと、白い壁とほとんど同化した小さな貼り紙はがあつて、

「土曜日のみ限定。〈土曜日のハンバーガー〉」

とあつた。

なんだろう。土曜日だけメニューに並ぶハンバーガーがあるのだろうか。たったそれだけのことしか書かれていない貼り紙なのに、食い入るように眺めてしまい、少し頭がぼんやりして、目の前のテーブルに視線を戻すと、

「あの——」

店の中に声が響き、声ができる方を見ると、先の彼女ではない女性が、すっと背筋を伸ばして立つ

ていた。こちらをじっと見ている。

目と目が合い、このひとがミユキさんだろうか
と思った瞬間、

「アキヤマ君——ではないんですよね」

背筋を伸ばしたままその人はそう言い、みるみ
る瞳ひとみが潤うるんでいくのが、少し離れたところからで
もよく分かった。